評価コメント３

山　内　正　平（千葉大学普遍教育センター教授）

関内先生と同じですが、どうして私がこの場に立っているのかということを自分なりに考えてみました。これはGPの評価コメントなので、GPの成果は他大学に参考になるようなものでなければならないという趣旨に沿って、京都大学のGPの成果を参考にしたい大学の立場からお話をさせていただきたいと思います。特に個人的には、教育学のことを何も知らない、ただ、大学教育の現場で教育改善にかなり積極的にかかわってきた人間として、とりわけ京都大学の取り組みを下から見上げるような立場にいる人間として、コメントしたいと思っています。

まず、個人的な問題です。私の気持ちの中にあるわだかまりを、自分自身のためにまず確認しておきたいと思っています。率直に言って、FDには付き合いたくないという思いがあります。今、私が付き合いたくないと感じているFDは、田中先生の言われたいわゆる「啓蒙型」のFDです。というのは、絹川先生が中心になって推進してこられた大学セミナー・ハウスのFDプログラムに、私もかなり早い時期から参加させていただいていましたが、それは非常に楽しくて、それが良き思い出としてあるものだから、それを壊したくないという思いがあります。

それから、私が問題として感じていることですが、大学改革というのはいつも後手に回っているのではないかという印象を持っています。1989年に大学セミナー・ハウスから『大学は変わる』という本が出ましたが、大学は本当に変わったのかという思いがあります。大綱化直後、教養部がなくなって、すっかり様変わりしたということはありますが、大学改革が本当にそれで進んだかどうかという点については、非常に疑わしいと思っています。

FDというのは、そもそも外部評価のためにあるものではない。国立大学は現在、暫定評価のまとめの段階に入っていますが、おおむね測定可能な目標、数値化された根拠（エビデンス）が求められます。言葉で説明しようとすると、なかなかそれが根拠資料にならない。学内でまずそういう高いハードルがあります。ですから、FDとは何なのだろうかという思いが私の中にあります。

これも国立大学の状況だと思います。中期計画絡みかもしれませんが、公的機関としての社会的責任を果たすために、大学教員の評価を大学が定期的にやらなければいけないという状況になっています。千葉大学も４月から、新しい教員評価の仕組みが導入されます。もし教員評価で教育に対する努力が足りないと判定されたら、別に処罰対象になるわけではありませんが、大学が主催する研修会に参加しろということになりかねない。FD義務化がそのように利用されていく可能性があるのではないかと懸念しています。偶然かもしれませんが、現在、国立大学で進行しつつある教員評価とFD義務化が、非常にタイミングよく出会っているというのが私の印象です。

私個人としては、授業内容と方法の改善は非常に重要なことだし、これは田中先生のお話にもありましたが、まずここからスタートだと思います。しかし、それぞれの人が、面白く楽しくやれないとちっとも先に進まない。面白く楽しくやれるものであれば、私も積極的にかかわっていきたいと思っているところです。

京都大学の相互研修型FDの成果に関しては、これは田中先生のスライドの中にも出てきたことなので、私がここで細かく取り上げなくてもいいのだと思いますが、日常的な営みの中で自己開発を実現するというFDの本来的な機能回復というものが、とりわけ公開授業等で実現できているというところは非常に大きな成果なのだろうと思います。それによって、同僚性、あるいは実践のコミュニティのようなものが形成されてくる。そういう仲間意識というか、コミュニティの形成というものがFDには欠かせないもので、そこは非常にうまく機能しているように思いました。

それから、これはGPそのもののテーマだったということですが、工学部との連携というテーマがあります。これが京都大学というローカリティという部分ですが、京都大学の中でFDをどう展開するかという出発点に当たるもので非常に重要な点かと思っています。また、委員会方式とセンター方式が融合しているのだと田中先生のお話にありましたが、委員会方式だけだと、先ほど関内先生のお話にもありましたように、各部局何人出せというような形で、FDが形骸化しかねません。また、センターだけだと、本当にセンター任せになってしまう可能性もあるので、全学の委員会とセンターとがうまく絡み合いながら、FDを実施していくというのは非常に面白いと感じました。

GPのテーマが工学部との連携ということでした。私自身が千葉大学園芸学部でかかわってきた経験なども交えて、工学部との連携について簡単にコメントさせてもらいたいと思います。公開授業については、ここで私が特にコメントすることはありません。ただ、千葉大学でも一部、公開授業、授業参観といったものが試みられているという事例を知っていますが、多くの場合はモニター型になっています。田中先生がおっしゃっているように、公開授業の中でコミュニケーションが実現できれば非常にいいと思います。ただ、実現までに苦労が多いのだろうなと実感します。

ここではそれは脇に置いて、工学部との連携について、とりわけセンターが支援されている内容について、コメントをさせていただきます。まず、授業評価の実施によるカリキュラム改善ですが、田中先生のお話の中では、カリキュラムの改善に、実際にどれだけつながっているのかよく分からないのだというお話しでしたので、そこは差し控えます。授業評価そのものについて、先ほど田中先生のスライドの冒頭で、授業アンケートは国立大学で100％実施されているけれども、改革に反映している大学は59％しかなく、順序が逆転しているだろうというお話でした。確かにそのとおりだと思いますが、個人的には59％もあるのかというのが実感です。59％というのは、国立大学に身を置く者としての実感では、大きな数字です。大学全体で授業評価を改革に反映させているのは、実際には59％もないだろうというのが率直な印象です。

授業評価のありようですが、京都大学工学部の場合は記名式をとっています。これをお聞きして、千葉大学でも考えた方がいいと思いました。このメリットとしては田中先生もご指摘されましたが、成績との関係が見えてくる。それから、授業間の比較ができる。また、同一学生の４年間の経年変化をきちんと読み取ることができるというお話でした。詳しいことは大塚先生に聞いてほしいということでしたが、恐らく調査や分析は可能なのだと思います。ただ、それを実際の工学部のカリキュラムの改善や授業改善に活かしたり、改革を実現させていくためには、別の支援が必要なのではないかと感じます。

ですから、工学部の教育シンポジウムについて先ほど田中先生からご紹介いただきましたが、工学部の教育改善の営みが日常性を確保するためには、データの提供、あるいは調査・分析だけでは不足しているのではないかというのが率直な感想です。それは例えば、千葉大学園芸学部を想定したときに、園芸学部の人間だけではなくて、学部の外の客観的な立場で導いてくれる人たちが必要だという気がします。多分、工学部もその点に関して大きな期待をかけているのではないかと思います。ですから、その期待にセンターが応えられるかどうかは、今後、見ていきたいと個人的に思っています。

それから卒研の調査プロジェクトですが、これには率直に疑問があります。このスライドに書かせていただいたようなものですが、卒業研究の調査だけで学士課程全体の学生たちの学習状況が把握できるのだろうか、あるいは評価できるのだろうかという疑問があります。一つには授業アンケートの分析についてです。年月がたたないので、まだ不十分なのかもしれませんが、例えば同一学生の４年間の経年変化をとらえていったときに明らかになってくるものかと思います。

それから、京都大学の工学部は特別な授業科目として創成型教育というものを立てていないと書かれていました。創成型と呼ばれる教育内容について、目標というものを立てておられるのかどうかよく分かりませんが、卒業研究だけで達成できるのだろうかと思うのです。これは個人的な経験・体験からですが、卒業研究というのは学生にとって非常に大きな充実感が伴っています。だから卒業研究の評価については、学生たちが実態を包装してしまっているということはないのだろうかという思いがあります。卒業研究については、別の視点から見た方がいいのではないだろうかという気がします。卒業研究調査では、卒業研究が工学部の学科編成というか分野編成、カリキュラム、授業改善にどのように活かされているのか。そこが私にはよく見えませんでした。

千葉大学園芸学部の一つの例を出させていただいて、京都大学の試みがわれわれにとってどのように参考になるのかということに触れさせていただきたいと思います。

園芸学部は非常に弱小な学部です。とりわけ独法化に際しては、学部がなくなるのではないだろうかという心配が本当にありました。教授会で議論されたこともあります。どこから出てきたのか知りませんが、常磐線沿線に農学系の学部が多すぎるという声があったらしくて、東京も含めれば、農工大もあるし、東大もあるし、筑波大もあるということで、三つもあれば、あとは要らない、千葉や茨城などはなくなるだろうという噂でした。そうしたときにどのように身を振るか。千葉大学のどこかと一緒に交ざってしまうか、あるいはもう少し大きな規模で合併するかといっ

た、いろいろな議論がありました。

それとはまた逆に、旧園芸学校としての伝統があり、国立大学で唯一の学部としての、名前への思い入れもあります。そういうところから園芸学部そのものの課題意識というか、共通の問題意識が形成されていて、それが一つのコミュニティの形成につながっている。非常に消極的な理由かもしれませんが、いずれにしても課題意識が共有されているわけです。ちょうどその時期に、JABEE の認定を受けようという話が起こりました。分野では農業工学と森林の二つで認定を受けました。JABEE の認定を受ける準備を進める段階で、われわれは何をすべきなのかということを、非常に時間をかけて議論しました。学部がなくなるのではないかとか、やはり学部は残したいとか、そういう思いはあっても、なかなか具体的な改善に進んでいかないのです。そのときに JABEE 認定があったということは、園芸学部にとっては非常に良かったと思っています。

昨年４月に改組がありました。コース制が導入されて、３学科から４学科に編成替えになって、旧来の研究室を中心にした教育研究体制が一応なくなり、コースと教員を中心にしたという状況になりました。私の目から見れば、従来よりも学習者中心のカリキュラムに変えることができているように思います。それでも園芸学部の場合は、受験生が増えないという悩みが相変わらずあります。

京都大学の工学部との連携の中から、われわれがヒントとしてもらったことですが、司会の大塚先生と松下先生からインタビューを受けた機会があって、そのときに園芸学部としてどうしても使わなくてはいけないと感じたことが２点あります。一つは、卒業研究そのものをもう１回われわれが評価し直してみるということです。つまり、卒業研究の指導のプロセスがどうだったのかということを考える。先ほども申し上げましたように、学生にアンケートを取ると、卒業研究については結構いい評価をします。少なくても千葉大学の場合にはそういう傾向があります。しかし、実際に担当していた者としては、もう少しきちんと作業をしてくれればいいのにと思うことがあります。そのギャップを整理してみたいということです。

そういうところから、京都大学工学部での創成型教育の達成度を保障していくような学習プログラムであるとか、あるいは従来の授業科目の中にそういった要素を盛り込んでいく仕掛けなどを考えていくことができるのではないか。それによって、卒業研究から逆に入り口までの４年間の学習プログラムをデザインすることができると考えているところです。

もう一つ、ここは非常に重要だと思いますが、レポートや試験問題、答案、学生のノート、それから、私のところは作品があるので、作品等のポートフォリオを評価し直すということも重要です。例えば答案は JABEE の関係で学生に返却しないといけないことになっていますが、先生方はおおむねコピーをとっておられます。しかし一度引き出しにしまわれると、そのまま眠ってしまうという状況になりがちです。それをもう１回取り出してきて、ほかの先生方と一緒に検討してみるといった日常的な営みも可能なのではないかと思っているところです。そのように考えると、卒業研究や学生たちが残してくれるような資料なども含めて、講座や学科で共有して、日常的な改善につなげていけるような資源は非常にたくさんあります。そういうものが相互研修型 FD につながっていくのではないかと思います。

相互研修型がどういう意味なのかよく分からない面もありますが、田中先生の別の図の言葉をお借りすれば、日常的で実践的ということなのではないかと思います。現在は、以上のような資源を活用して、自分自身が面白いと感じ、そこに加わったほかの人たちも面白いと感じられるような改善の取り組みを試していきたいと思っています。

実は、私は２年前に園芸学部から普遍教育センターというところに移りました。普遍教育というのは、京都大学でいうと共通教育です。関内先生の東北大学ほどの規模はありませんが、東北大学のセンターと同じような位置付けになるセンターだと思います。その中でこれから面白いと思える試みに取り組みたいと思っているところです。

コメントになったかどうか分かりませんが、あとは皆さんの討議を期待したいと思っています。ありがとうございました。

（大塚）　山内先生、どうもありがとうございました。工学部との連携についてのコメントもあったので、私からもまた後で補足させていただければと思います。

それでは最後に、絹川先生に評価コメントを頂きたいと思います。絹川先生は特色 GP の実施委員会の委員長をやってこられていますので、そういう大所高所からのお話も伺えるのではないかと思います。

ＧＰの成果を参考にしたい大学の立場から

（教育学の専門家ではない普通の大学教員の目から）

山 内 正 平（千葉大学）

1

個人的な問題の所在

・ＦＤには付き合いたくないという思い
（10年くらい前の大学セミナー・ハウスの良き思い出）

・つねに後手にまわる大学改革
（どうしても行政主導型になってしまう大学）

・外部評価のためのＦＤではない
（測定可能な目標と数値化された根拠が求められる）

・教員評価とＦＤの惰性的な結合への懸念
（国立大学で進行しつつある教員評価とFD義務化の奇妙な出会い）

・授業の内容と方法の改善を楽しくおもしろく実行したい

2

相互研修型FDの成果いろいろ

・FDの本来的機能の回復
（日常的な営みにおける自己開発への貢献）

・同僚性に基づく実践
（実践のコミュニティが課題意識を共有する）

・工学部との連携
（京都大学というコミュニティ組織化へ）

・委員会方式とセンター方式の融合
（委員会だけでは、FDの空洞化がおきかねない）

3

個人的関心は、工学部との連携
（千葉大園芸学部の経験を交えて）

具体的な支援内容

1)「授業評価の実施によるカリキュラム改善」
2)「卒業研究調査」
3)「公開授業による相互研修」
4)「遠隔授業」

とくに「授業評価」と「卒業研究調査」について

4

「授業評価の実施によるカリキュラム改善」

記名式のメリット（千葉大でも考えるべき）
・成績との相関
・授業間の比較
・同一学生の４年間の経年変化

調査分析は可能だが、カリキュラム改善、授業改善に活かすには、さらに別のコンサルテーションが必要ではないか。（データ提供だけでいいのか。工学部の教育シンポジウムから日常性確保へ）

（千葉大園芸学部を想定したときには、学部外の客観的な立場からの導き手が必要と思われる。）

5

「卒業研究調査プロジェクト」
（2006年度速報板に目を通して）

率直な疑問

卒業研究調査だけで学士課程全体が把握できるか
・授業アンケート分析との関係
・創成型教育（問題解決、リーダーシップ、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力etc.）の目標達成は卒業研究で足りるか
・アンケート回答は教育現場の実態を包装しないか
（卒業研究は学生にとって充実感が伴うので）
・工学部の分野編成、カリキュラム、授業の改善にどのように活かされるのか

6

千葉大園芸学部の場合（生き残りのため）

JABEE認定による改革推進
・学習目標の設定と公開
・学習時間の保障
・教育点検システムの構築
・教育環境の整備
・学生支援

独法化への心配
・学部が消えないか（離れたキャンパス）
（他大学、千葉大内での合併吸収などのうわさ）
・伝統（旧園芸学校）と名称への思い入れ
（コミュニティーの形成）

１９年度改組とコース制（学習プログラム）導入へ

7

ヒントをもらったこといろいろ
（記名式授業アンケート、卒研調査の他に）

・卒研そのものの評価（成績評価ではない）
卒研指導（学習時間と方法）のプロセス
創成型教育の達成度を保障する根拠
出口から振り返る学習デザインの構築　etc.

・その他の学生が残してくれている資料の評価
レポート、試験問題・答案、ノート、作品等のポートフォリオ　etc.

講座（コース）や学科で共有し、日常的な改善につなげる資源はまだまだたくさんあり、相互研修型ＦＤの種は尽きない。

8